

マシユラップとの出会い

マシユラップという言葉をはじめて知ったのは、二〇〇一年の夏、ホータンである。いつものように、調査のあいまに、中心街にある新華書店に立ち寄り、本を探していた。そこに古本のような画集が置かれてあった。少し破れているところもあるが、ウイグルの自然の風景、人物、社会の姿が写実的に描かれ、役に立つこともあるだろうと買い求めた。ウイグルでは多くの書店で見かけることだが、新刊に混じって、古い本も置いてある。この画集も一九九三年発行だから、かなり古い本である。

アブドシユクル・ケリムがその画家の名前である。一九四九年、東新疆のハミで生まれ、新疆芸術学校を卒業している。その画集のなかに「ハミのクック・マシユラップ」があった。ほぼ、中央に伝統的な服の女性が「青い新芽の麦」を盆に載せ立っている。犠牲にする羊を持つ少年がいて、演奏する人もいる、周りを多くの男女が囲んでいる。「クック」とはウイグル語で「青、緑、緑の牧草、新芽」などを意味する。ノルズ節という春の祭りの中で行われることから、麦の新芽を祝うマシユラップである。ノルズとはペルシャ語で春の最初の日を意味し、日本での春分の日に始まる祭りである。昼の時間が長くなるように冬が終わり、春が始まる日である。この日にダンス、歌、競技、食事などを楽しむ、イスラム以前から中央アジアに広く存在する。

一年後、ウルムチに住むケリム氏に会うことができた。「今は、あのような写実的な絵は描いてなくて、抽象的な絵、またはアラビア文字の書画をしている。自分の絵はコムル（ハミのウイグル名）のレストランの壁画で残っている。クック・マシユラップは小麦の種まきを祝うもので、祖父母の時まではしていた。中華人民共和国になっても存在していたが、人民公社、文化大革命の時代になくなった。絵に出てくる服装は唐の時代にコムルに入ったもので、今はアトラス模様が多くなっている。」最近、このマシユラップを復活させて、ビデオ撮影をしたとのことで、これを見せてもらった。この儀礼のなかにカラスが悪者として出てくる。にわとりを取ってしまうのである。ウイグル人には芸術は欠かせない、苦しいときも歌やダンスをよくすると話されていた。

マシユラップとは何か

いつも調査しているホータンで聞いても、マシユラップは何かおめでたいことがあると

みんなで祝い、踊り、歌い、食事すること、としか答えが返ってこない。後で知ったことだが、ホータンは比較的マシユラップは薄い地域であった。マシユラップはアラビアの「一夜一夜物語」に出てくるほどだから、イスラム以前から広く行われていた古い習慣である。ただ、あまりにも日常的な祝いであるため、歴史的文献などにも断片的に出てくるだけである。元来、マシユラップ (*mashrap, mashrab*) もしくはメシユレップ (*meshrep*) はアラビア語で「酒を飲む場所」の意味である。

マシユラップは中央アジアのトルコ系民族に、イスラム以前の古くから伝わる集団的な祝い、娯楽の習慣である。収穫が終わる晩秋から、春の耕作が始まるまでの間に行われる。音楽、歌、踊り、冗談、詩の朗読などがその内容である。収穫祭という意味を持ったマシユラップもあるが、特定の目的を持った祭りというよりも、断食月の終わりなど、各種の祝い事に伴って行われることも多い。一応の組織的役割分担もあり、規約なども存在する。者のマシユラップへのイニシエーションもあり、すべての人が参加できるわけでもない。

人民公社や文化大革命の時代は中断していたが、改革開放以後の文化復興の波に乗っている程度は復活している。しかし、民族運動の集会和誤解され、政府から中止されたこともある。マシユラップはウイグル人社会に古くから存在する自発的結社として、日本の「講」にも似た組織である。講と同じように、宗教的、経済的、親睦的など、多様な機能を担っている。柔構造的な組織であり、時代とともに、またウイグル自治区の地域でもかなり相違がある。

次の記述は一九一三年、クチャで断食月のあける祭りで、毎晩のように行われたマシユラップの様子を表している。(1) アクサカルの庭園が大広間で行われた。老婦人、若い娘、若い妻と夫、未婚の若者たちがすわっている。弦楽器のドタール、タンバリンのようなグループからなる楽隊がいる。お茶、氷砂糖、ナン、果物が出されている。ダンスは一人、または数人の若い男女によって、組んで踊られる。男女が組んで踊る種類のダンスは、イスラムの場合違和感を覚える。おそらくこれらのダンスはイスラム以前の古い時代の名残なのであろう。

また、ダンスのほかに若者たちが扮する「牝牛」や「馬に乗った男」の道化芝居が演じられる。このおどけた怪物が分厚い唇で、前のほうに座っている若い女の一人からキスを奪おうとすると、観客の喜びはさらに大きくなる。さらに、チリムと呼ばれるダンスは、常に女性の側から相手を所望するダンスである。妻が観客としてこのような祭りに参加することはべつだんかまわないが、ダンスに加わることは特に上流階級の人からはしたくない

こととされる。

では、現在のウイグル人ほどのようにマシユラップを考えているのであろうか。アメリカ在住のウイグル人団体が「メシユラップ・コム」というインターネット・サイトをつくっている。それによると、農民による収穫の祝いとなっている。踊り、歌、冗談、詩の朗読などが出し物である。中央アジアのトルコ系民族の間で秋に行われる。マシユラップに若者が入るためには、父親に連れて行ってもらい、カジ（審判）からの要望を聞き、マシユラップの成員の承認をもらう。メンバーがマシユラップの規則を破ったなら、その人は面白いやり方で罰を受けることになる。年上の人の悪口を言う、酒を飲むなどはその罰の対象となる。マシユラップはウイグルの伝統的な娯楽的集まりである。(2)

その伝統的なマシユラップをウイグルの民俗学者からの抄訳で見てみたい。

マシユラップの民俗誌・マシユラップ・バザム（娯楽 祭り、宴会）(3)

マシユラップは明らかに民族的であり、広範な大衆が持つ特別なものである。ウイグル人たちの民族的精神の輝かしい表現、音楽、踊りであり、野外での教育でもある。あらゆる種類の面白い出し物が演じられる。マシユラップの出し物はパターンによって、マハツラの特徴をだしている、名前も内容も多くの種類がある。たとえば、ドラン・マシユラップ、メイリシ・ケイト、青い（種まき）マシユラップ、トイ・マシユラップなどがある。このほかに、ヘイト・バイラム（祭り、儀式）をするときの宴の宵や親しい人とのチェイ（dinner party）、別れのチェイ、謝りのチェイなどのようなマシユラップの特徴を持つものもある、この宴の宵のマシユラップもある。付加的に喜劇的特徴をもつあらゆる種類の出し物が演じられる、ほかに楽器の演奏、歌と踊り、機知に富んだ話、チャクチャク（冗談）が基本になっている。

ドラン・マシユラップは普通、年長の狩人の生業活動が反映している4つの違う「仕事の踊り」が基本の踊りが行われ、男女の集合で演じられる。トルパン、コムル・マシユラップは「帯の踊り」が基本の踊りで行われる。

このマシユラップ・バザムを楽しく行うため、組織された一組の「規則」と「スタッフ」がある。この規則とスタッフはマシユラップの参加者と相談して、構成され、選ばれる。この規則はマシユラップ参加者にとって道徳である。よい品格の友達を持ち、規律、道徳心への導きを鼓舞するマシユラップである。マシユラップの「スタッフ」はイギット・ベシ、カジ（カーディー）、パシヤップ（巡警）、・・・などと称される。マシユラップの参加

者は通常「オットズ・オグル」(三十人の男)と称され、もし「スタッフ」のカジが能力がないとしたら、オトツズ・オグルは他の者を選ぶ。また「規則」の重大な違反をしたらオットズ・オグルは次々と追放される。この「規則」には、マシユラップに遅れないこと、理由なく出てこない追放、誠実になること、興味のある行いをする、年長者への尊敬、年少者の保護、婦女への無用な冗談の行いなどをしない、などがある。

マシユラップは毎年、晩秋の初めから春の種まきまで行われ、参加者は二、三〇人を超える。このために、ひとつのマハツラでのマシユラップの趣向について話し合う一組が作られる。伝統的な習慣によって、十八歳以下は参加できない。マシユラップの参加者はそれぞれの種類で変わる。マシユラップは毎年、再度組織される。改新する「選挙」が行われる。その年のマシユラップは、オトツズ・オグルが順に新しい一人の男、若者を加えるために、この若者はチャイをしなければならぬ。登録された一人の男の青年は、マシユラップの参加者自身を守る規定を維持する名誉な仕事を与えられる。それゆえ、この若者の両親はそのための一頭のオスの家畜をささげ、オトツズ・オグルの食事の布、ダステイハンを用意する。

三〇人の男のマシユラップ(4)

ウイグル人が住むあらゆる土地に、マシユラップは広く存在する。内容が豊富で、組織的な制度を持ち、体系的である。それは「三〇人の男のマシユラップ」(オットズ・オグル・マシユラップ)と呼ばれる。

「三〇人の男のマシユラップ」はイリ地方のウイグル人たちのローカルなマシユラップであった。それは参加する範囲は男たちだけであり、限られたマシユラップの名前と儀式であった。だが、マシユラップはそれぞれの種類の集団の儀式組織を司る大衆の組織の名前となり、このため、「三〇人の男のマシユラップ」はあらゆる郷(エザ)に広がった。あらゆる村(キャント)―マハツラに「三〇人の男のマシユラップの組織」がある。

「三〇人の男のマシユラップ」の組織

マシユラップのベギ(カーディー、裁判官)、イギット・ベシ(若者頭)、ダリガイ・ベギ、コル・ベギ(会計)、サクチ(警備)などの役職がメンバーに割り当てられてある。

マシユラップのベギ(カーディー)は「オットズ・オグル・マシユラップ」では最も高い地位の称号である。かれによってマシユラップすべてのプロセスが取り仕切られる、マ

シユラップの法的側面をあつかう。

イギット・ベシはマシユラップの基礎の組織の若者頭であり、マシユラップの活動のリーダー的な役割をおこなう。

ダリガイ・ベギ(ダラ・ベギ)には基本的にマシユラップの特徴である活動と歌、踊り、音楽などを扱う。それゆえ、ダリガイ・ベギはこの村(キャント)で歌や音楽がうまい、技能の高い人を選んで、決めていく。

コル・ベギはマシユラップのすべての費用、経済的なことを司る。普通、マシユラップがすべてうまくいくように、コル・ベギがそれを決める。マシユラップはコル・ベギの指示にしたがって実行される。

サクチはマシユラップの規律を司る、普通は「公安」が責任を持つ地位である。マシユラップの規則―制度を破るものを暴く、警備は直ちにマシユラップ・ベギと若者頭に通知する。また、罰を実行する責任がある。マシユラップの参加者はサクチが司り、それに無条件に従う。サクチは手にふつう「花の枝」といわれるむちを持っている。「花の枝」は柔らかい柳の枝かシモツケソウで作られる。罰の執行を直接的にする警官はその「花の枝」によって軽く打つ。

「三〇人の男のマシユラップ」のメンバーになるには数に制限がある。だが、一つのマシユラップの組織は三、四〇人ぐらいである。「三〇人の男のマシユラップ」のメンバーであることの条件は地域に住んでいることである。

マシユラップへのイニシエーション

最初に、マシユラップに参加したいという若者は父にマシユラップに連れてもらう。サクチはこのことをマシユラップ・ベギと若者頭に伝える。許可をもらうため、若者の父はマシユラップのメンバーのまえで、この子がマシユラップのメンバーになりたいという願いを伝える。マシユラップ・ベギと若者頭に「この子の骨はわれわれのものである、肉はあなたの方のものである、礼儀や道徳を教えてください、それがマシユラップにつれてきた理由だ」という。若者頭は若者にいう、「このマシユラップには優しいことも、きびしいこともある、耐えうるものだけに許可が与えられる。」そのあと、若者は「耐えます」と答える。このようにして、マシユラップへの許可が与えられる。このとき、マシユラップの人々は、この子が何を持ってきたらよいか知っているかどうかを尋ねる。その子の父は「三〇人の男の繁栄のため」と答え、何頭のらくだ、何頭の馬、牛、羊、を持ってきたらよいか良く知っ

ている、と答える。

実際にそのふるさとの家畜の名前がマシユラップ全体のシンボルの名前となる。らくだとメロンもしくはスイカ、馬とたまご、牛もしくは羊、それとりんご、などが選ばれる。この贈り物は警備が選んだあとで、マシユラップの範囲で配られる。その贈り物に同意したらマシユラップは受け入れる、この若者自身、一定の一つ以上のことを、「三〇人の男」で最初に指示されて誓う。もし、その特別なことができないなら、動物のまねか、一匹のオスの鳥がさえずるのをまねしなければならない。同時に、子の父親は男のマシユラップに加えられ、榮譽ある「三〇人の男」の家のマシユラップに招待される。

若者頭はこの新しいメンバーをマシユラップに加え、「三〇人の男のマシユラップ」のルールの体系を知らせる。マシユラップのメンバーとなって初めての人には「マシユラップ」全体の許可が得られることが必要である、そして、参加の許可がなされる。もし、マシユラップを引退する人があれば、理由を「三〇人の男」に納得のいく説明をする、自分が存在した理由は、若者の面倒を見ることだったといって、よく知っているマシユラップを二回したあとで退く。

マシユラップの内容

「三〇人の男のマシユラップ」にはほかの土地と似ている歌や音楽や踊りがある、冗談やなどもあり、芸術のようである。

「三〇人の男のマシユラップ」の規則や制度に違反すると、与えられる罰は二種類あり、一つは経済的な罰、もう一つは過失の罰である。経済的な罰は罪の重い・軽いとその人の経済的な状態を考慮して行う。最も重い経済的な罰は「三〇人の男の繁栄」のために自分の番のほかにもう一回、「謝罪のマシユラップ」をしなければならぬ。軽いのとは次の回のマシユラップのためにすべての種類の果物、砂糖、お菓子のようなものを用意しなければならぬ。

過失の罰は多くの罰がある、「サムサ（ナンの肉まん）を焼く」「ジュワズ（油絞り）をひく」「羊の肺に小麦と脂肪を詰める」「結び目を造る」「二人の女性を連れてくる」「カッコの鳴き声」「キジバトを飛ばす」「ウサギをける」「かぼちゃを割る」「むちの禁止」「恥を忍ぶ」「水に入る」「顔にススを塗る」「庭のりんごを摘む」など面白おかしいことをしなければならぬ、これらはユーモラスな遊びである。この罰はカクチが決め、行う。

「三〇人の男のマシユラップ」は基本的に秋の収穫に集まり、始める。次の年の春の耕作

まで続く。

「三〇人の男のマシユラップ」は四つの段階の催し物をおこなう、また、それぞれの回で、集まったマシユラップのメンバーはいくつかの重要なことを議論し、計画を考える、このふるさとの民衆（ジャマアート）のことについて相談し、考える。祝いも死も含めてトイ（儀式）を導き、家族の状態を尋ね、助け、解決する。このように、「三〇人の男のマシユラップ」はふるさとの共同体の権威と名声を高める、このふるさとの人々はこのマシユラップ集団と親しくまとまっている。

要するに、ウイグルの「三〇人の男のマシユラップ」は民俗の「芸術・アートの学校」であり「礼儀―道徳のゆりかご」である。このように、他の種類の公衆のマシユラップ、儀式の組織や援助を広げている。

マシユラップの出し物

ウイグル人たちのマシユラップの活動は、たくさんの種類の内容に表現され、それらには芸術的習慣、歌と踊りがあふれ、マシユラップに「命をよみがえらせる」多様な民俗の出し物がある。この種の出し物は必要な状況に応じて、マシユラップで演じられ、それらは「マシユラップの出し物」といわれる。

マシユラップの出し物は基本的に二つのパートからなる。一番目のパートはマシユラップで決められたもので、マシユラップの伝統的な出し物である。それぞれ、なんらかのマシユラップ（特にドラム・マシユラップ）でいくつかの音楽―踊りをしたあと、音楽演奏者と踊り手は休んで、そしてマシユラップの雰囲気をさらに高めるため、「若者頭」が鑑定した「むちの演技」「ベルトの演技」「茶を開始する演技」「詩―バラードをうたう」、などの出し物が行われる。この出し物はそれ自身の特別なルールがある。マシユラップの人々のだれかが最初する。そのあと、はじめの人はだれかに願い、出し物を継続させる。「茶を開始する演技」でAという人が一つの茶碗のミルクなしの茶を右手で持つて、軽快に一周し、回りの婦人（小さいカップに茶を少量つがなければならない）に与えた後、一つの二行詩とともに茶を自分の好きなBという人にわたす。この人がカップを受け取る、そのあと、Aはその場から消えてそして、Aという人が始めた順序に従って、Bはカップをまわす、三番目は別の人に渡す。このようにして、遊びを続けるのである。若者頭とマシユラップ衆は遊びを監督する。もし、だれか手のカップをまわす途中で茶を落としたら、あたらしい「罰」が加えられる。この「罰」はマシユラップの人々の要求で何か代わりの物を

与えるか、自分の周りにいた一人の男のプログラム（歌を歌う、家畜の真似をする、他の人を自然に笑わせるような男の道化の演技をするなど）の代わりをする。それゆえにマシユラップの参加者に茶のない「空の手」がくることがある、このようにたぶん心の準備が必要である。

それよりさらにドラム・マシユラップにはドラマの特徴をもつあらゆる種類のおかしい出し物がある。たとえば、泥棒を非難して「チェスト泥棒」の出し物、貿易キャラバン「らくだの出し物」、役人の仕事を皮肉る「アンバン（清の時代の役人）の出し物」、不道德ものがばかげたことをする「おじいさん」、「ライオン」、「二匹のねがおろかな言い合い」、など喜劇のエピソードの出し物である。

マシユラップの出し物の二番目の群は「罰の出し物」などである。マシユラップは自発的な大衆の活動であるが、昔から、それはひとつのまとまった伝統のしきたりである。このしきたりはマシユラップの規範と秩序を保証する「マシユラップの基本の法」である。しきたりを破るもの、「若者頭」の判断に従わない人、そして女性への不品行をする人は「罰へひきだされる」。この罰はマシユラップの人々に笑いをもたらす、そして厳しく教える。「サムサを焼く」「印をつける」「二人の女性がやりとりする」「油絞り機をひく」「羊の肺に小麦粉と脂肪をつめる」「塊を造る」「頭を下げる」など名がつけられている罰の特徴を持つユーモアの出し物などである。

この罰マシユラップのルールを破った人がわかると、警備（マシユラップの秩序・規律に責任をもつ）が乗り出してくる。「若者頭」に報告したあと、若者頭の権威のもとに、訴えがなされる。もし行為が重大ならば、マシユラップから追放ということになる。マシユラップの罰を受けた人は共同体の権威を傷つけるから、すべての人がマシユラップの伝統的な規則・きまりを意識して尊重する。ここにはウイグルのマシユラップが長い間、持続的に続いた理由がある。

要するに、ウイグルのマシユラップと民族的芸術は発展して、そして礼儀・道徳の学校である。

ケイト・マシユラップ

ケイト・マシユラップは東新疆ウイグルに広く散在するマシユラップである。「ケイト」とは「判決を下す」、「決める」ことと同じである。

いわば、「ケイト・マシユラップ」は本質的に「判決を下すマシユラップ」である。人々

の間では「ケイト・マシユラップ」はもともと「殺すマシユラップ」(死の罰が与えられる)が変化した形といわれる。

ケイト・マシユラップには二種類のパターンがある、一つは範囲が狭いカタール(順番)マシユラップのパターン。もう一つは、儀式に少女が参加し、儀式は夕方から次の日の夕方まで一日続くケイト・マシユラップである。このマシユラップは範囲が広く、内容が豊富である、一〇〇から二〇〇人が参加する。このマシユラップは単に儀式であり、若者と少女と一緒に友達を招待する。客は座る場所に絨毯、フェルトのようなマットレスをひるげる。

そのとき、それぞれ3人の若者の最初の一人が短い脚のテーブルを置く。マシユラップの席の主なマシユラップ「王」のために一つの大きな丸いテーブルをおく。席の右手側にはもう一つ丸いテーブル(シラ)をおく。これは「カーディー(裁判官)」のために用意された席である。規則に拠れば「王(パイディシヤ)」は若者集団のマハッラからで、「カーディー」になるのは少女集団のマハッラから用意される。

イギット・ベシ(若者頭)は客たちの男、女友達を席に招き、今日のマシユラップを動かす人の名前の候補者をあげる。

多くの人が相談し、大衆のやり方とマシユラップ全体のリーダーシップをとるパイディシヤ、ワジル(大臣)、カーディー、ムフティー(イスラム法学者)、バザール・ベギ、コル・ベギ(ハズナ・ベギ)、アンギザ(刺激)、お茶売り、編む人(パトヌスー皿を編む人)、キカスチ(掛け声をかける人)が順に選ばれる。そのあと、コル・ベギが、儀式進行を準備する、あめなど甘いものがすべてのひとのテーブルにおかれる、三〇の皿が揃えられる。このあと、マシユラップの進め方について「パイディシヤ」は命令をバザール・ベキかアンギザに告げる。少女たちに関してはマシユラップの中に入る準備をはじめ、秩序ある集団を作る。年取った人たちは周りを見てマシユラップの監督をする。

ケイト・マシユラップは四つの段階に分かれる。

第一の段階、パイディシヤの命令が発せられたあと、ナグラ(太鼓)とスナイ(笛)による音楽がはじまる、それが最初で、次に二番目、三番目、四番目のマシユラップが行われる。歌と踊りがやむことなく続く。最後には、音楽が静かになったあと、別のだしものが終わる。

第二の段階、ひとつのドラ、笑う出し物が始まる。最初、ひとつのドラの出し物の過程でパイディシヤの命令を破るトラブルに気づいたマシユラップの役職者はパイディシヤに話し、

非難する。これによって、マシユラップ・カーデイーは「罪人」に本当がどうかを尋ねる。尋問の結果、パディシャの命令がなされたあと、パディシャの命令のあと「罪人」が決定され、罰か別の種類の罰が与えられる。カーデイーは「罪人」の帽子をとって、死の罰を宣告する。それから、罰のマシユラップが申し込まれ、低くなって、罪を認める。パディシャは罪を許す、アンギザにそのあとで罪が渡され、アドバイスをし、帽子をとる。罰を受け入れず、反対するとマシユラップから追放されることになる。

あるひとは「羊の皮をむく」「このしるしをつける」「サムサを食べる」「鳩を飛ばす」「大きな器に冷たい水を入れる」「浸された棒」のような罰を受け、そしてほとんどが笑いをさそう冗談がいわれ、教えられる。この種の「罰」は全体のマシユラップで面白い状況で、笑える出し物などである。この段階の終わりにはもう一回、ナグラーズナイが行われ、そのあと歌―踊りが最高になり、ムカムが低くなって終わりになる。

第三の段階、おかしいことをする人たち、とおしゃべりをするひと（ほら吹き）が中心に現れ、それぞれのほら吹き合戦がマシユラップの人々を笑わせる。また、何人かのおかしいことをする人が「四一の嘘」のような笑わせる物語を話す。この段階は大変面白いことが行われ、また、ナグラーズナイの伴奏があり、歌と踊りで終わる。

第四の段階、パディシャとカーデイーが承認したあと、アンギザが疑問をなげかける、従うよう声明を出す。質問をするひとはまず三〇の皿に砂糖―御菓子を置いて始める。カーデイーの前に出たあと、質問を始める。なされた質問にカーデイーとイスラム法学者は相談し答えを出す。答えは真剣になされ、マシユラップの人々は拍手をしてそれを認める。もし答えが真剣なものなら、カーデイーは他の人に質問をするようにし、九の皿にお菓子―甘いものを持って、それぞれ、一〇倍する。すべてで九〇の皿にお菓子―甘いものを返し、自分のカーデイーの席に質問をするマシユラップが始まる。

それはまた再び二回目のカーデイーが評価を投げかけるときである。それゆえ「ケイト・マシユラップ」でカーデイーがすることは、このふるさとマハッラを啓蒙することである。機敏と賢さが若者たちの心から出てくることである。なされた質問の内容は民衆に関係する知識―科学、算数、などなどと言葉の出し物などである、たくさん謎々への答えを考える機会となる。

質問と答えが終わり、またもう一度、ドラの出し物が演じられる、最後の「面白い音楽―踊り」「ケイト・マシユラップ」の別のマシユラップの特徴、それは最後の段階の知識―科学はそれぞれの種類の内容の質問と答えの形によって、自然環境を大衆に理解させるこ

となどである。

クック（青） マシユラップ

新疆の農業の収穫の後、開かれる昔のお祭りや儀式として、第一に「苗のマシユラップ」（中央アジアの古代文化に関係した起源の「民族の祭り」と言われる）があり、これはクムル、ピチャン、トルパンなどの東新疆のウイグル人のなかで今まで続いてきた。この儀式は今クムルで「クック・マシユラップ」といわれ、ピチャン地方で以前の名前では「ミス・マシユラップ」「苗の出し物」と呼ばれていた。

「クック・マシユラップ」は境界的な特徴を持っている、これは毎年十一月に始まり、次の年の春まで続き、特定の時間で決められた儀式の日によって限定されている。「クック・マシユラップ」は直接農業生活に関係するものである、クック（苗）になるのを待ち焦がれ、主な豊作の現われとなるよう、クムルの人々はマシユラップをする。

「クック・マシユラップ」には比較的以前の習慣（仕方）のようなものがある。手洗いの壺の頭を取って、花びんのように、きれいな状態にして、このなかに土をいれ、手のひらに一、二杯の小麦か大麦をまく。小麦が発芽して苗になったあと、それぞれの種類の飾りによつて、この大きな道具があたかも美しい女性、少女に似てくる。これは「クック」といわれている。クックの準備をする主催者はまた、干しぶどう、オルク・カク（干しアブリコット）、干した桃、ナツメ、グミ、メロンの種、干したりんご、干したメロン、大豆など9種類の干した果物（枝）を一つの皿に準備した状態（串）になった食事を準備しマハラの人と親しい人を招き、夕方のマシユラップが組織される。

マシユラップの終わりに苗の心を引く一つの「クックの詩」が読まれる。同時に、苗を渡す人が準備して、喚起する踊り「クック・マシユラップ」開かれる。このようにされる「クック」をいろいろ人の手に渡し、周期的な状態で回され、春の植え付けの初めまで、「クック・マシユラップ」が絶えることなく続く。苗を渡す人はこの名誉でかならずマシユラップを行い、マシユラップの組織の「クック」を丁寧に育て、枯れて倒れないようにしなければならない。クック・マシユラップでは参加者は愉快に興奮し、笑い（娯楽）のなかで「私は一本の矢を射る」と言う、もう一回「私は一本の矢を射る」：「私は三本の矢を射る」と言って、次の回のクック・マシユラップが開かれるときが決められる。一本の矢を射ると明日の夕方、二本の矢を射ると明後日の夕方、このようにしてクックは冬に回される、自分の持ち回りが来る次の春の相談をする。要するに、クック・マシユラップ

を誰が組織するか、作法によってまた自分に回ってくる。クック・マシユラップの参加者の数を考え、集め、三〇人の大衆と矢がある。

「クック・マシユラップ」を開く世代から世代へと連続し、様式が豊かになって、さらに安定する。現在に従うと、昔の伝統の型は失われる。今の型では小麦の苗を冬の日が家の壺に、鉄もしくは陶器に束にして芽を出す。オスとメスの鶏の形を美しい赤の紙で切り抜く、それを一つ一つ、苗の中に立てる。その周りにもまた赤い花をさして、とうもろこしの囲いが立てられる、雪に見立てた小麦粉を苗にふりかける。それから、クックは赤、緑のサテンによって飾られ、その上をスカートで覆う。

クックが芽を出したら、その主人は一つの生地、食事と丸の皿のドライフルーツを用意する。同時に、十五から二〇の男女のペアがよばれ、「クック・マシユラップ」が始まる。マシユラップの双行詩を造る人、詩人、キカスチ（ヘイヘイと掛け声を言う人）、このような人たちは、特別な招待がなされる。ギジャク奏者、ラワップ奏者、ダップ奏者、などの音楽家が決められ、席に座る。マシユラップは夜どうし続き、終わりに、顔を覆うクックの苗と一つの布の服がだされ、九つの皿のすべての種類のドライフルーツを用意した主人役の男女の二番目の一組の男女は詩を二つ披露する。

この間、音楽家たちは音楽をやめ、マシユラップの人の注意をその中心に向けさせる。クックを渡すホストたちはおかしい話によって双行詩を始める。男の主人役は「冬―厳しい冬にあらわれるにんじんは春の始まり。すばらしい腕前で花が咲く冬…この花は信頼によって評判になる、そして確実に咲く花への貢献が評判になる。花の陰にすわりこころは動く、花を手に入れた人はまず微笑みはじめる、花を育てすばらしいものになる、それぞれの人生を思い出し、主人はキスをする」という。

女の主人役は「あのアラ―の力は第一にこの苗を緑にする、王マンリックが発芽の色づくときに届けた苗、少女テワナは座った姿が黄金の苗。その姿が黄金の苗の力をスルタンまで届ける、月の顔の光は新しい花まで届く。冬の苗の芽が出るのはやさしいことではない、この出し物を演じるのは私たちや私ではない。この話はつくりごとであるが、ひとつだけは作り事ではない。苗を育てて、喜びを得る、静かにしておく、高い棚においておく、感情全体が休まる、高い家で成長したら脱穀する、苗が渡され、わたしたち、穏やかに眠る、この世のことはすべて中断し、止まる、あひるが三〇羽、羊が三〇頭、すべて一緒に準備し、幸運がある、心のネックレスは一組の既婚の女が準備する、鎌を渡す、ラワープ、カルン、サタールを準備する…」といった。マシユラップの人「オー、ありがとう」、「ア

ラーに幸運あれ」といって、苗を渡す人を祝福する。種まきをする男女のマシユラップの人々は、世話した人を朝晩、自分の家のマシユラップに招待する。それから、男女は2つの苗を手で持ち上げて立って踊る。キカスチは皿、お盆にあらゆる果物をもってあらわれる、席で踊りをする人はくるくる回る、「乾燥し、枯れた、家畜のわら、ひとつの家族が踊る、まるで花のようだ」といって、キカスチは合いの手を打つ。

主人が一つの盆のアトラスーサイ(シルク・サテン)を持ち上げて手に取る、大小の客たち、歌い手たちは頭の向きを変え、「ジョワプツ、ジョワプツ、ヘイ、若者よ、ブラボー、キカス」という。みんなも回って「ブラボー、キカス」と一緒に言う。喜びの頂点は高くなる。マシユラップの人々は青い苗をしっかりとつかんで、家で歌や音楽をしながら、植え替える。

ドラン・マシユラップとドランの踊り(5)

ドラン・マシユラップは基本的に、マキット、マラルベシ、ヨップルガ(テリム村)、アクス・アワット、シャヤルのタリム河岸の村、郡、地区のウイグル人の間で行われている伝統的な芸術活動の一般的な名称である。ドラン・マシユラップ自体は古いものである。散在する範囲は広く、活動内容は多くの種類があり、そして特別なウイグル・マシユラップも残っている。

ドラン・マシユラップは一般的にドラン・ムカムに忠実といわれ、組織された大衆芸術活動である。その音楽と歌と踊り、あらゆる種類の儀礼的催し物と、冗談を相互にかけあうことは「大衆の芸術学校」といわれてきた。

ドラン・マシユラップ活動の中にはすべてのおかしいことと意味のあることがある。ドラン・ムカムの伴奏、集団の踊りの動きでそれが表現される。ドラン・マシユラップの集団の踊りの動作は昔の世代が狩猟をしていた時代の仕事の仕方、基本的には四つの段階的な踊りのそれぞれのパートが考えられている。

第一の舞台は「チキットマ」があり、最初、ムカム(プロローグ)、そして男女のカップルがメロディのよい音楽の音のなかで、ステップに従ってゆっくりと踊っていく。男たちは手を変えて右左と振っていく。右半分の女は一時的であり、最初、右足から三つのステップを踏み出す。三番目のステップは右足の半分で回る、左の足の先はまっすぐで止まる、左足は直ちに位置を変える、右足の動きの方向に従って繰り返しが続く。この主導する踊りの動きはあたかも狩人がうつそうと茂った森で、密な茂みを二つの手でゆっくり引

つ張り、狩の動物を探す生き生きとした情景を映し出している。

ドランの踊りの「チキットマ」の二番目の舞台は「踊りの音楽」が変わる、踊りのリズムが変化する、動きも早くなる。踊り手たちは次第に広がっていく。男女は手を口まで持ち上げて、ペアで寄り添って、軽快に右と左が対応するステップに従って、完全な円を作る。このステージはとてもスピードがある。踊る人たちが軽快に前後に動く、左右に転回する、手の前でジェスチャの動きは動物を追って鋭く捕らえる情景を見せている。

ドランの踊りの三番目の舞台は「サリカ」をする、この舞台の踊りはそこにいるすべての人がゆっくり、ゆっくりと一つの大きな輪を作っていく、踊りはその輪の形のサークルの線に沿って続いていく。この状況は狩猟者が集まって動物を囲む光景を描いている。

第四段階「シイルマ・乳牛」、この段階の音楽のリズムにからみながら大きい円の範囲が分かれていくことから始まる。これとともに踊り自体も前後に回転する、

要するに、ドラン・マシユラップですることはドランの踊りを複雑に精巧にする、

マシユラップには若者や農民、年寄りのマシユラップなどがある。年寄りには宗教的であり、若者は自由である。農民は収穫後、小麦の豊作を祝う。マシユラップの内容は宗教と関係がある、社会の発展、時代とともに変化する。人数はオトツズ・オグル（三〇人の男）といっても、決まっているわけではない。大勢の人という意味である。マシユラップは団体ではなく、メルシヤップという進行役のような人が、どこでやるか、みんなに知らせる。マハッラ、郷、単位、ホータン地区のようないろいろな範囲で行う。

マシユラップに遅刻したとか、悪いことをしたら、イギット・ベシがリーダーとして罰を与える。お金ではなく、冗談で犬の声、歌を歌う、蛇のようにくるくる回る、杏を食べさせるというような罰である。そして、みんなを笑わせる。イギット・ベシの選び方は、偉い人、尊敬される人、学者、知識を持つ人などが選ばれる。人前でパンツを脱がない、年上の女性に冗談を言わない、タバコを他人の前ですわらないなどに違反したら罰を受ける。参加できるのは結婚した若者だけであり、結婚してない若者はだめである。見るだけで、参加できない。普通は十六から十八歳で結婚する。

年寄りのマシユラップは、五十歳以上である。宗教的で、古い本をよむ、健康に良いことをする、歌や踊りはする。楽器もする。リズムがゆっくりである。冬にすることが多い。ホータンの歴史や、この薬がいいとか健康について話し、友達同士で集まる。いまでもメロンができたといっっては集まる。二十日に一回、家を変えて、レストランでも、果樹園で

もいい。同じ年の幼なじみがほとんどである。互いに病氣見舞い、葬式に行く、結婚式にも行く。同じ考えだけの人が多い、政治の話はしない。噂話もしない。七時間ぐらい続く。費用はイギット・ベシがもつ。奥さんが得意な料理でもてなす。そこにきたら偉い人もみんな平等である。

農民のマシユラップは収穫が終わったときや季節の初めにする。畑でも、家でもいい、学校でもいい。する季節は、三月か四月で、緑が見える春の季節が多い。会社がスポンサーになって、一万人が集まって、バクチ郷でマシユラップをしたことがある。男も女も行って、互いに知り合う良い機会である。

日本の講との比較

主にこれまではマシユラップの内容、生のデータを記述してきたが、「講」との比較をするために、講について述べていこう。講は自発的結社として、古くからあり、組織的にはマシユラップより明確である。祝いのとき、踊る、歌うなどの、娯楽的要素は見られない講もある。講もその機能は多様である。種類も機能によって数多く、存在する。

①、宗教的講(6)

もともと講は仏教の教えを説く集まりとして始まったものであるから、宗教的な講が多いのは当然であろう。民俗的宗教の山の神講、水神講、田の神講、船霊講、氏神講、また、広範囲な信仰団体の神道系…御獄講、仏教系…観音講、薬師講、地藏講、浄土真宗…報恩講、日蓮宗…身延講などがある。霊山信仰の参拝講として、恐山講、筑波山講、富士山の浅間講、熊野三山講、石鎚講、英彦山講などがある。有名な神社仏閣に参拝する講として、伊勢講、善光寺講、大宰府講、宇佐講などがある。職業の守護神を祭るための講もある。鍛冶や牧牛業者の荒神講、牧馬や馬車業者の馬頭観音講、大工などの太子講、漁師のえびす講などである。

②、社会的講

社会的講は地域の共同生活が反映し、相互扶助による契約講、労働力交換のゆい、モヤイ講、年齢別の子供講、若者講、老年講、葬式組の無常講、性別によるカカ講、娘講、尼講など、がある。

③、経済的講(7)

金品の融通をはかる目的でつくられ、頼母子、無尽、模合と呼ばれ、融通する品目により、米頼母子、船頼母子、馬無尽などがあつた。相互扶助的な金融方式であり、一定

の口数を定め加入者を集め、一定の期日ごとに各口について一定の出資をさせ、一口ごとく抽選または入札によって所定の金額を順次加入者に渡す方式でお金を融資するものである。明治以降に新しい銀行制度が確立されたが、一般の人々の間では質屋や無尽が多く利用された。しかし、資本主義の発達により、無尽も会社組織で経営するものが多くなり、戦後は整理統合され、相互銀行になった。

このような講は日本全国に存在しているわけではなく、ひところの農村社会学でいわれたように、日本には同族結合の東北型農村と講組結合の西南型農村の二つの類型がある。西南日本に多い講組結合の農村は、「家」意識が薄い。講の組織原理が示しているように、東北日本のように本家・分家関係のタテのつながりよりも、ヨコのつながり、自発性、平等が重要視される。本題からされるが、西南日本にはウイグルに多い「末子相続」も見られる。

また、マシユラップには加入するには年齢制限があり、また年寄りだけのマシユラップも存在する、男だけのマシユラップもある。これは、ある種の年齢階梯制的なことを想像させる。年齢で社会を構成するのは平等的な原理である。これは日本の若者組、年寄り組などの年齢階梯制と似ているところもある。そして、年齢階梯制はまた、西南日本に多いのである。

これからのマシユラップ研究

本章はマシユラップの民族的な記述を中心に展開してきた。イスラム社会はイスラム教だけで解釈されがちであるが、イスラム以前からウイグルに存在するマシユラップは、彼らの共同性を理解する上で、重要な文化である。マシユラップについてはそれほどの調査研究もなされていない。

さらに戦後の激動期にもまれ、テレビ、音楽などの普及で、娯楽としてのマシユラップは衰退の一途をたどっている。重要な民族的な芸能として認識され始め、ビデオなどに記録して残しておこうとする試みは行われている。しかし、演奏する人は高齢者ばかりであり、若者は関心がない。その状況で伝統的な民俗芸能として研究書が最近出始めている。ただし現時点での調査観察において、昔のようなマシユラップの姿を追い求めても無駄であろう。踊りや歌、楽器演奏はウイグルの民族のイメージとして、政府側に歓迎され、地方政府主催でマシユラップが行われることが多い。しかし、同窓会、幼なじみ、結婚式な

どいろいろな祝いの機会に、自発的で小規模のマシユラップは開かれている。

マシユラップの民俗誌（ホータン）

マシユラップについては、シャーマニズム、仏教、イスラムのそれぞれの時代に続いていたが、違いはある。ピリ・マシユラップ（治療儀礼でもある）のピリはバクシ、ダーハーンと似ている。ダップという楽器を使う。音楽、歌、ダンス、冗談、男女が互いに歌う。日常生活、祭り、建築祝い、結婚などにする、葬式ではしない。歌は互いに笑う歌が多い。歴史を見るとイスラムが来た後は禁止され、変化した。

種類は次のようなものがある。

Ⅰ 古典的マシユラップ

- ① 結婚式のマシユラップ…現在見ることができない。
- ② ジュワントイのマシユラップ…現在見ることができない
- ③ 家の新築、家族のマシユラップ…現在見ることができない
- ④ 家の新築完成、親戚のマシユラップ…現在見ることができない
- ⑤ 庭のマシユラップ…現在見ることができない
- ⑥ サラハットマーのマシユラップ、ノルズのようなもの…現在見ることができない、ノルズとしてのこっている。
- ⑦ クズラグ・マシユラップ、メロンを味わう、野外でのマシユラップ…現在見ることができない
- ⑧ セイリ・マシユラップ、マザールでの遊び、旅行者のマシユラップ…現在見ることができない
- ⑨ ハマンのマシユラップ、種まき、綿花の。金持ちが昔、広大な綿花畑を持っていた、誰かが、綿花の皮をとれないと、楽隊を呼んでマシユラップをした。…現在見ることができない
- ⑩ カールック・マシユラップ、初雪のとき、名と時間を書いた紙を別の家においておく、その人を捕まえることができれば、その人がマシユラップをする。できなければ、捕まえようとした人がする…現在見ることができない。

- ⑪ オーグラックターティシユ・マシユラップ、馬に乗る…現在見ることができない

Ⅱ ターグ・マシユラップ

山地、牧畜民がするマシユラップである。ランル、カシユテシユ（ホータン県）、チャカ、ウルサイ（チラ県）ノル、ボスタン、アツチャン（ニヤ県）などで行われている。楽器も簡単、歌も民間歌謡である。

① ダラ・マシユラップ、野外でおこなわれる。

② トイ・マシユラップ、山の人の結婚式。

③ ウイ・マシユラップ、家の中でする。

④ イグニティシユ・マシユラップ、糸をつむぐスピンがこわれた、服を作ってあげる、そのためのマシユラップ、

㊦ ピリ・マシユラップ

ダップだけを使う。シャーマニズムとイスラムの混合である。

㊧ キヤラン・マシユラップ

皮山、ピリヤン、バシユランガ村、コシユタン村で行われる。他のところと違うのは、すべての楽器が使われる、ドタールなど、ムカム、ドラン・マシユラップのような、有名な歌が使われる。昔の作者ナワイなどがつくった。

マシユラップの未来は存続するが、変化するだろう。なくなったものもある。サラハットマーは農民がアラーに豊作を願うものであった、今、農民は農業技術を発展させ、肥料なども使う、それが必要がなくなった。マシユラップはトルファン、コムル、アクスでも見られる、近代的になっている。カザック陣にもあるが違っていると思う。キルギスもあるがドンブラのように一種類の楽器で、ウイグルのようにたくさんの楽器を使うことはしない。新しいマシユラップが発生している。学校の友達、友人、家族、会社の友人などが集まって、マシユラップをする。新疆大学、一クラス、四〇人、卒業生は新疆全土に広がっている。仕事を退職して、年に一回どこかに集まる、今年はアクスとか、カシユガルに集まって、マシユラップをする。同窓会（アラムガ）、同じ役所に勤めていたというような集まりである。

ホータンではカルーンという古い楽器がない。板に弦を張ってある、今は誰も弾けない。バラマンは三人ひける人がいる。サター（ドタールの大きいもの）もある。ホータンのマシユラップは他の地方と違い、楽器の種類が多い。また、古い宗教、仏教、シャーマニズムなどを含んでいる、トルファン、コムルなどは古い、イリなどは新しい。「三〇人の男のマシユラップ」（オットズ・オグル・マシユラップ）はホータンにはない。イギット・ベシ

もホータンではそういわない、ホータンではミーマンベシである。ミーマンはゲストの意味である。カデイはホータンではドーガという。だれかがミスをしたらその人が罰する。ホータンでよく行われたマシユラップはつぎのようなものである。

- ① モラース・マシユラップ、ジュワントイなどのトイのあとの集まりで行う。
- ② サラハートマのような宗教的マシユラップ、もしくはピリ・マシユラップ、
- ③ セイラ・マシユラップ、コクマルムのようなところいつてする旅行者のマシユラップ、
- ④ 生産者のマシユラップ、収穫や家の建築の後など、
- ⑤ 季節のマシユラップ、雪が降った、春の始まりなど、
- ⑥ スポーツ練習のマシユラップ、馬に乗る、

ピリ・マシユラップは遊びと病気の治療の二つの側面をもつ。ナイフで手を切った、足の骨を折ったなどの病気は病院にいったほうがよいといわれる。しかし、悪い夢を見て、身体が麻痺したとか、声が出なくなった、夜に歩いて、何か騒がしい怖いものに出会った、そのあとに病気になった、野外で寝ていて具合が悪くなった、そのような時、ピリを組織する。精神的な病のとき、ダップをたたく、回る、病人はピリ・フォンの後を付いてぐるぐる回る。シェイタン（悪魔）、ジン（悪霊）、グイ（悪霊）などは火を恐れるから、必ず火がたかれる。ロープの意味は、シャーマニズムでは神を信じ、空は神に属している、大地は人間に属している。地下はシェイタン、人、動物などに属す。

ウグズ・ハンは本に書いている、枝を使い、二頭の羊をささげる、枝はアラールと人間を結ぶ、羊をアラールにささげる、火のそばでそれを焼く、煙が出て、よいにおいがする、煙は空に昇る、空にはアラールがいる、神とはアラールのこと、イスラムが来てから、シャーマニズムなどは禁止された、外ではできないので室内でするようになった、枝に変わり、天井から吊り下げたロープを使うようになった。歌も言葉もイスラムによって代わった。ジン・アラワステともいう、アラールは火からできた、人（アダム）は土からできた、アラールがはじめてつくった。シェイタンはアラールの近くにいた、それで人々はシェイタンに祈りをささげた、アラールはなぜ祈るのかと怒り、土地を取り上げた、シェイタンは人を見ることのできるが、人はシェイタンを見ることができない、シェイタンは神秘的な王である。アラールは最初に人を作り、次に穀物、果物などを作った、三番目は家畜である。

ジンは人には見えないが、ジンは人が見える。ジンは水車小屋、汚いところ、水路など

に住む、夜にそのようなところに行くと、ジンが取り付いて、病気になる。ピリは犠牲に羊をジンにささげ、病気をなおす。貧しい人は鶏の場合もある。金持ちは牛をささげる。

- ① ピリ・フォンはジンを呼び出す、ジンを集め、歌を詠む、
- ② ダップをたたく、

③ ダンシング、ぐるぐる回る。病人も回る。汗をかいて、よく寝たら直る。ジンと人々、神はイスラムの規則で動いている、ピリがジンを扱う活動はシャーマニズムである。この二種が混じっている。日本でも同じような現象がある。

マシユラップの民俗誌（カシユガル）

マシユラップは種類が多い。

① カタール・マシユラップ（順番）数人の友達が皆知り合いの地元で行う。集まる。今日は、明日はと持ち回りで、それぞれ順番で自分の家で行う。

② カララック（雪）・マシユラップ 雪が降った日に、紙に遊びと時間を書いて、他の人のかばんに入れる、その時間までにわたしがつかまれば、自分の家に招待する。つかまらなければ、相手が招待する。お金があれば羊を1頭ごちそうする、なければ果物でもよい。私の大学の学生もやっている。カルガリック、ヤルカンドに多い。

③ ターグ（山）・マシユラップ、農業、牧畜の人々がする。タジクやクルグスが多い。

④ ドラン・マシユラップ、ネゲット県、バーチュウ県、アクスのアワテイ県に多い。年の始まりのノルズの祭り（日本の桜祭りのようなもの）の時期に、昔、アクサカルや村長が相談した。イスラムの知識を持つ人（タリバン）が学校を卒業して、各地にイスラムの宣伝に来て、教育のために村長と相談する。ノルズはイスラム以前から存在した。三月二日ごろ1週間ぐらい行う。水利の責任者、農業、宗教の責任者らが相談する。一年の重要な会議であった（今はない）。今、ノルズは民俗舞踊だけになっている。地方によってマシユラップの内容は違う。

村と村とが仲良くし、いさかいをなくすために、村が持ち回りでマシユラップを行った。昔は法律がないから自由に参加できたが、今は誰が参加するか、役所に届けないといけない。一昨年、ノルズのとときアトシユで全員参加、政府後援でやった。参加者は舞踊する人、役人、近所の人など。親戚は関係ない。酒は飲まない、食事、踊りがある。にわとり、羊、人が相撲競技のように戦う。マシユラップの人間関係で金を融通しあう、講のようなものはない。例えば、橋が流された、誰かが亡くなった、石炭がない、水がないときには、お

金持ちは寄付する。参加者はお金を出さない。主催する人がごちそうする。今は、組織者は地方政府であり、ノルズは地区で行う。昔はモスクにワクフ（寄進地）があり、そこからの収穫の収益でマシユラップも行った。現在、ワクフは政府の土地になっている。今、マシユラップは小さなものでも自由にできない、集会をしたら、政治的目的だと疑われる、集会はすべて地方の政府に届けなければならない。冠婚葬祭でもなければ、今は組織する人もいない。昔は偉い人、アクサカル、アホンなどが組織した、など。現在の宗教委員会は、モスクの管理、掃除などをしている。

⑤ チューラックマシユラップ。

他人を招待し、見ず知らずの人も来る。隣の知名人を招待する、そのとき300人位連れてきてくださいと伝える。内容は子ども結婚式、モスクを建てたなど、めでたいときを祝うためする。金持ちに初めて息子が生まれたときなど、金持ちが参加者に施しをする。よその地域の人も訪れる。馬の競走もあり、羊を賭ける。女性は自分で作った詩で互いにやり取りする。このような大きいマシユラップは今はない。最近アトシユでのマシユラップは地方政府がお金を出し、伝統的な民族習慣を見せ、ふるさとを宣伝した。

⑥ クック（緑）マシユラップ、ハミのノルズマシユラップの一部。マシユラップはアラビア語ではなく、トルコ語の遊びと言う意味。トイ（お祝いの儀礼）はマシユラップではないが、部分的には似ている。トイは近年、派手になっている。スンナットイ（割礼式）をする人を、カシユガルではアブダル、エンギサルではジャレールという。医者のような役目である。『ウイグルラル・ウルパアデッテリ』（ウイグルの風俗習慣についての本）には、いまでは使われない言葉がたくさんある。

注

- (1) A・フォン・ル・コック（羽鳥重雄訳）、東トルキスタン風物誌、一九八六（一九二八）、白水社、一四二―一四三頁。

- (2) <http://www.meshrep.com/>

マシユラップはきつい農繁期のあとの収穫の祝いの意味である。それは通常祝宴であり、一人または集団の歌唱、音楽、ダンス、冗談を言う、ゲーム、詩を読むことなどを含んでいる。それは、中央アジアのウイグル、ウズベク、トルクメンおよび他のチュルク系の民族において、秋の収穫祭として行われていた。村民は規則によってマシユラップを組織し、ローカルの文化的伝統のタッチを豊かに

表現した。マシユラップはそれを構成するそれぞれその社会集団、若者、すべての男女、すべての年齢集団などによって特徴がある。マシユラップは参加者が従う規則をもっている。例えば若者をマシユラップに入会させる時、その父親は若者をマシユラップに連れて来て、次に、カージ(裁判官)から最初の「正式」要求に答え、マシユラップメンバーが、その子どもの入会を承認する。

メンバーがマシユラップの規則を破った場合、その人は楽しく愉快な方法で「罰せられる」。規則を破った場合、メンバーは、通常「法廷」に訴える。例えば、その人は年長者を尊敬せずに相手の感情を傷つけた、アルコール飲料を飲んでいる(それは厳密に禁止されている)、あるいは、その原告が「オルダ」(法廷)の中でカジが立証する「証拠」として使用される物語を単にでっちあげてもよい、その証拠で楽しく喜劇の方法で弁解させ個人を「罰する」。

マシユラップは伝統的なウイグルの娯楽集いである。それは、人々の間の文化交流をプロモートする、コミュニティ・メンバーが健全で愉快的な競技によって、休日を祝賀し、出産、ヘットメトイ(割礼、包皮切開)、結婚、誕生日、子供の卒業祝賀およびすべての種類の成功した社会的出来事を祝う。

(3) アブドラーイム・ハビビユラ、ウイグル民族誌、新疆人民出版社、二〇〇〇(一九九三)、四四三―四四六頁。(ウイグル文)

(4) アブドゥケリム・ラフマン、ラワイドゥツラー・ハムドゥツラー、シエリプ・ホシユル、ウイグル風俗習慣(ウイグルラル・ウルパアデテイリ)、一九九六、新疆青少年出版社、一四一―一四七頁 (ウイグル文)。

(5) 同上、一九二頁。

(6) 桜井徳太郎、講、平凡社世界大百科事典、一九九八。

(7) 斉藤博、無尽、平凡社世界大百科事典、一九九八。